

比 恵 64

—比恵遺跡群第122次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1170集

2012

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する博多区の比恵遺跡群の発掘調査報告書は共同住宅の新築に伴う調査成果についての記録です。この調査では土坑や溝など弥生時代中期に属する遺構が出土し、当時の集落の広がりを確認することができました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助になれば幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2012年3月16日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

例　　言

- 本報告書は博多区博多駅南4丁目202番の共同住宅建設に伴って2010年9月8日から9月22日にかけて発掘調査を行った比恵遺跡群第122次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
- 遺構実測、遺構の写真撮影は屋山が、遺物実測は濱石正子が、製図は熊谷幸重が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関する図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

調査番号	1023	遺跡登録番号	020127	分布地図番号	東光寺37
調査地地番	福岡市博多区博多駅南4丁目202番	事前審査番号	22-2-310		
開発面積	537 m ²	調査面積	120 m ²	調査原因	共同住宅建設
調査期間	2010年9月8日～2010年9月22日	担当者	屋山洋		

比 恵 64

－比恵遺跡群第122次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1170集



遺跡略号 HIE-122
調査番号 1023

2012

福岡市教育委員会

本文目次

I	はじめに	1
II	調査の記録	4
1	調査の経過と概要	4
2	遺構と遺物	4
1)	河川	4
2)	溝	8
3)	貯蔵穴	10
3	小結	10

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	調査地点位置図	2
第3図	調査地点周辺図	3
第4図	調査範囲図	3
第5図	調査区全体図	5
第6図	SX001土層図・出土遺物実測図1	6
第7図	SX001出土遺物実測図2	7
第8図	SD002(003・004)、SK005遺構・遺物実測図	9

表1	遺構・遺物一覧表	10
----	----------------	----

図版目次

図版1	1. II区全景(南東から)	2. 調査区西壁土層(北東から)	11
図版2	1. I区遺構面(北から)	2. SD002土層(北東から)	12
	3. SD004土層(南西から)	4. SK005土層(南東から)		
図版3	1. SD002(北東から)	2. SD002遺物出土状況(南西から)	13
	3. SD004(西から)	4. SD003(北西から)		
図版4	1. SK005(南西から)	2. SK005(南東から)	14
	3. SX001 Aトレンチ(西から)	4. SX001 Bトレンチ(北西から)		

Iはじめに

1 調査に至る経過

平成22年(2010年)6月30日付けで株式会社NTT西日本アセット・プランニングより福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に福岡市博多区博多駅南4丁目202番における埋蔵文化財の事前審査依頼(事前審査番号22-2-310)が提出された。申請地は比恵遺跡群の包蔵地内に位置しているため、7月13日に重機を使用した確認調査を行い遺構面の深さと遺構の遺存状態を確認したところ、以前の建物基礎で破壊されているものの、北側ではGL-120cmの鳥栖ローム上で遺構を確認した。また、南側ではGL-85cmで暗褐色土の包含層を確認した。これらの調査結果と予定されている建物の計画を比較すると、建物の基礎による遺構の破壊が避けられないため、工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を図ることで協議が成立した。工事は敷地全体を対象とするが、遺構の破壊を伴うのは敷地南西側の建物基礎部分の203.75m²で、後は駐車場など遺構に影響を与えない工事であるため、調査は建物基礎部分のみを対象とした。以上の協議を受けて平成22年(2010年)9月8日から9月22日の期間で発掘調査を行った。

調査期間中は原因者及び関係者各位から休憩所や水道の設置などで多大なご協力を得た。記して感謝したい。

2 調査の組織

調査主体

教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

埋蔵文化財第2課課長 田中壽夫

調査第1係係長 米倉秀紀

調査庶務 井上幸江

調査担当 尾山 洋

作業員 浦伸英 岡部安正 片岡武俊 河原明子 桑原美津子 静啓子 鈴木誠 戸山龍男

中村健三 平田周二 吹春憲治 山田美恵子

整理作業 熊谷幸重 藤野洋子

3 遺跡の立地と環境

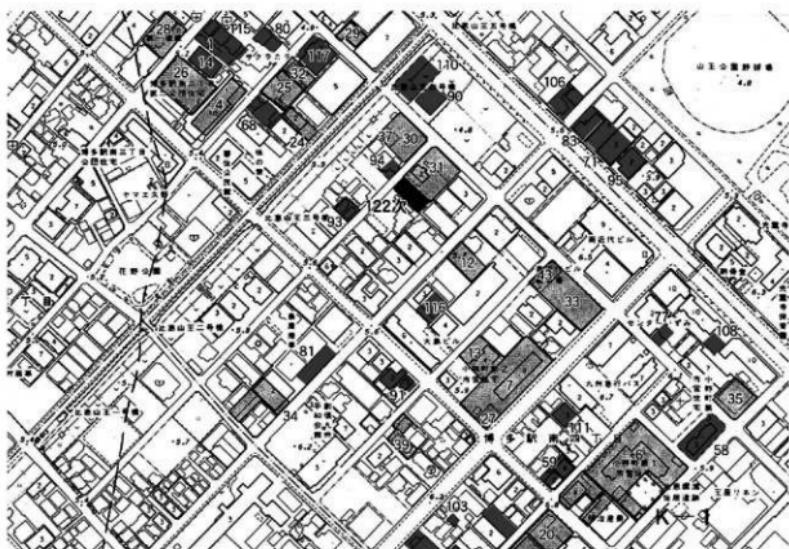
比恵遺跡群は福岡市のほぼ中央部に位置し、福岡平野の中央部を流れる那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上の北端部に位置する。この洪積台地は花崗岩風化礫層を基盤として、その上に阿蘇山の火砕流に由来する八女粘土と鳥栖ロームが堆積したもので、南は春日丘陵に端を発し、博多湾に向かって延びている。この台地上には多くの遺跡が分布しているが、これらの遺跡群では旧石器時代から近世までの数多くの遺構が検出されており、特に弥生時代中期～古墳時代前期にかけてと古代において遺構の密度が濃い。今回の調査区は比恵遺跡群でも北端近くに位置しており、周辺では東側に30次・31次・37次調査区が隣接し、また北西側に100mほど離れた地点で24次・25次・32次の調査が行われている。

台地北端に近い25次や26次では弥生時代前期の竪穴式住居が出土した。その南側の30次・31次・37次調査区では弥生時代前期の貯蔵穴40基が集中して出土した他、弥生時代中期の井戸、古墳時代の溝や集落などが出土している。

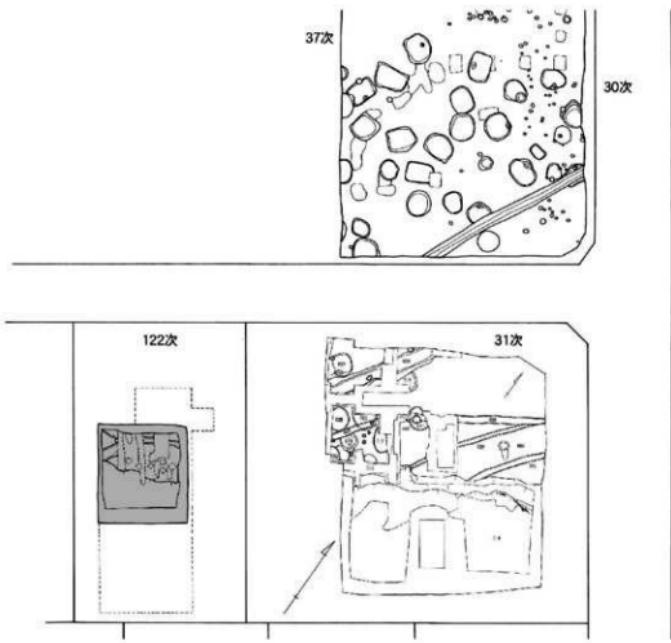
- 1 比恵遺跡
 2 山王遺跡
 3 那珂遺跡
 4 東那珂遺跡
 5 那珂君休遺跡
 6 省居遺跡
 7 上牛田遺跡
 8 梶田遺跡
 9 古塚遺跡
 10 堅粕遺跡
 11 博多遺跡
 12 福岡城跡



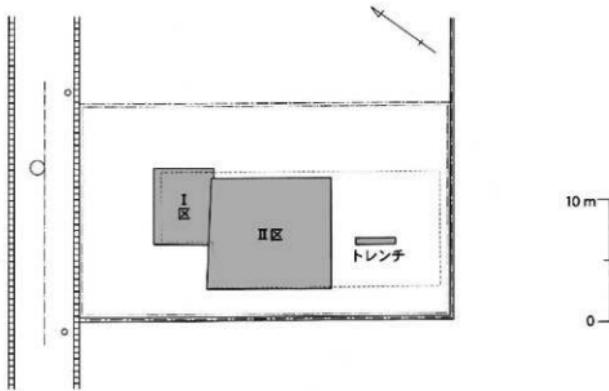
第1図 調査遺跡分布図 (1/50,000)



第2図 調査地点位置図 (1/4,000)



第3図 調査地点周辺図 (1/500)



第4図 調査範囲図 (S=1/400)

II. 調査の記録

1 調査の経過と概要

本調査区は比恵遺跡群が分布する台地の北端近くに位置しており、第30次・31次・37次調査地点が東側に隣接する。30次と31次・37次調査地点では貯蔵穴群が南北に長い帯状に広がっており、その南端が今回の122次調査区に延びることが予想された。

今回申請された博多区駅南4丁目202番は敷地面積537m²を測り、今回の発掘調査はそのうちの建物基礎で遺構が破壊される203m²を対象とした。試掘トレンチの結果では建物基礎により鳥居ロームが削られていて、現表土から遺構面までは1.2mと深く多量の廃土ができることが予想されたため、その置き場所を確保するために調査区を3分割して発掘調査を行うこととした。

調査はまず原因者による外柵、水道、ユニット、トイレ等の整備が行われ、それが終了した後の9月8日に北側のI区から表土剥ぎを行った。しかしI区は元の建物基礎等による削平が激しく遺構が確認できなかったことから、写真撮影と平板測量を行ってから埋め戻し、そのまま調査区中央のII区の表土剥ぎを行った。II区は北側が台地上で、南側は東西方向に流れる河川にあたる。河川部では上層の暗茶褐色土層(第6図 6層)から遺物が多く出土したもの、中層の粗砂層(12~24層)から出土した遺物は少ない。また25層以下は湧水が激しく、広い範囲を掘り下げると壁面が崩壊する恐れがあることから、湧水点以下は全面掘り下げを行わず、部分的に人力によるトレントン調査を行った後、重機で下層の砂を掘りあげて遺物の有無を確認した。調査区南側のIII区も全面調査ではなく、II区を埋め戻した後、一部に重機によるトレントンを入れて9月16日に調査を終了した。

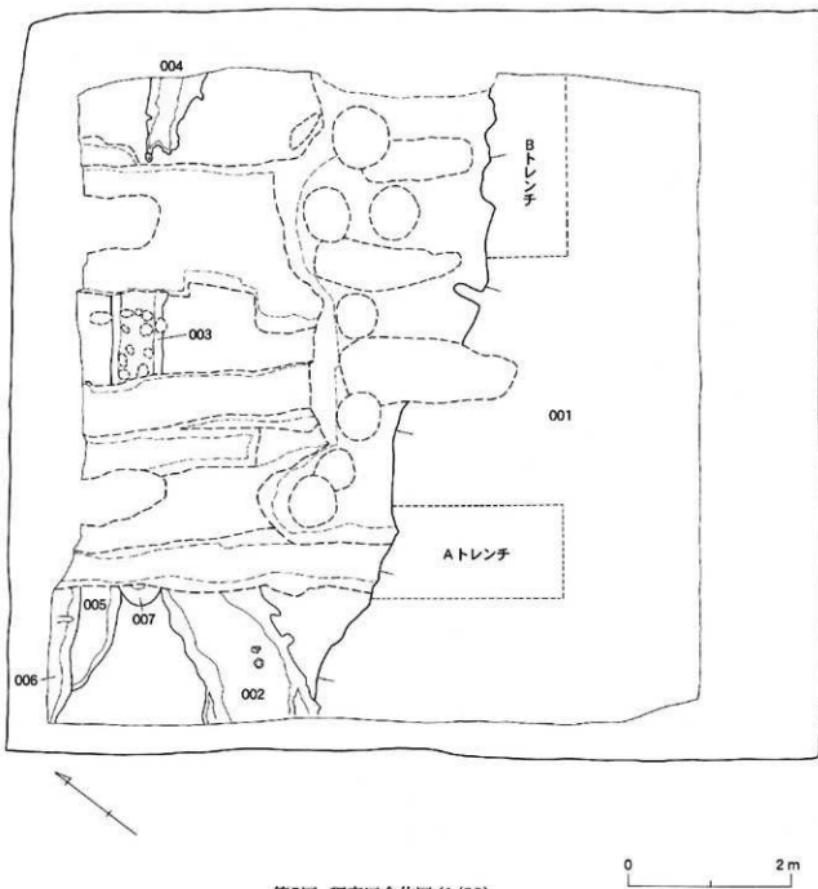
遺構は台地上でのみ検出し、河川上層の暗茶褐色土層の上面では遺構を確認できなかった。

検出した遺構は擾乱で寸断された溝が1条と貯蔵穴の残れと思われる土坑が1基、擾乱の可能性がある土塙が1基、柱穴状の掘り込みが1基である。

2 遺構と遺物

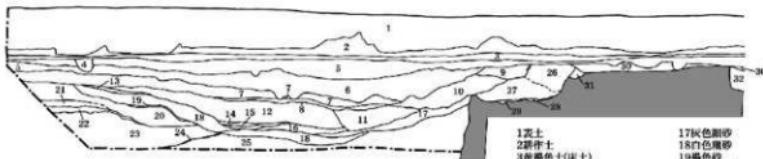
1) 河川

SX001 敷地の南側半分を占める東西方向の河川（もしくは谷）である。SD002を切る。東側隣接地で行われた31次調査の担当者によると、激しい湧水のため底面まで掘り下げることは困難であった。今回の調査でも標高2.3m付近で水が湧き出したため、前述したように全面的な掘り下げをあきらめ、トレントン調査に切り替えて掘り下げたが、この方法でもトレントンの壁が崩壊して掘り下げに困難を極めたため、最終的には重機で部分的に掘り下げた。手掘りのトレントンは岸に直交するAトレントンと岸に平行するBトレントンを設定した。Aトレントンでは、底面から若干浮いた状態で80cm角前後のロームブロックがまとまって出土した。流れに岸の下側を抉られて河に崩落したものと思われる。Bトレントンでも同様のブロックがみられた。遺物は上層の暗茶褐色土層から多く出土したが、遺物の時期は弥生時代のものが多く（表1）、若干古墳時代前期にまで降る土器片を含んでいる。河川に切られているSD002は31次調査の成果から、古墳時代後期と考えられているが、SX001がそれを切ることから河川が埋没した時期は古墳時代後期～古代頃の可能性が高いと思われる。出土遺物は中層を主に記載した（第6・7図 001～016）。001～004は甕口縁部である。001は暗茶褐色土層から出土した。復元口径22cmを測る。色調は外面が黄褐色で、一部煤のため黒褐色を呈す。胎土には1～2mm程の白色砂を多く含む。調整は口縁部は内外面とも横ナデ、外面は口縁下に指オサエがみられ、その下は斜め方向のハケ目が見られる。内面は全体にナデを施し、口縁下3cm前後に指オサエの痕跡が残る。焼成は良好である。002～004は河川中層から出土した。002は小片で色調は灰～暗灰褐色を呈す。胎土中

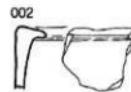
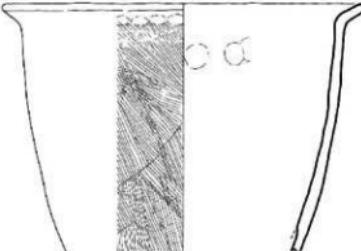


第5図 調査区全体図 (1/60)

に1mm程の白色砂を多く含む。調整は摩滅のため不明瞭であるが、全体的にナデの痕跡が残る。焼成は良好である。003は復元口径28cm前後を測る。色調は白褐色で、一部赤みをおびる。胎土中に多くの白色砂の他、赤褐色や黒色粒を少量含む。調整は摩滅のため消滅しているが、外面口縁下の屈曲部にナデの痕跡が残る。焼成は良好である。004は復元口径28cm前後を測る。色調は内面が淡黄褐色で赤味を帯び、外面は摩滅のため白褐色を呈す。胎土中に多くの白色砂の他、赤褐色や黒色粒を少量含む。調整は口縁部両面が横ナデ、内面にナデを施す。外面は摩滅のため不明である。005は中層から出土した壺底部である。復元底径は7.3cmで残存高は6.1cmを測る。色調は灰褐色を呈し、外面に煤の痕跡、内底部に焦げの痕跡が残る。胎土中に白色砂を多く含む。調整は外面胴部が縦ハケ、外底部は摩滅の

2 m
0

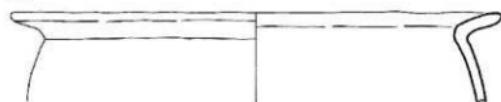
001



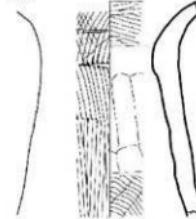
005



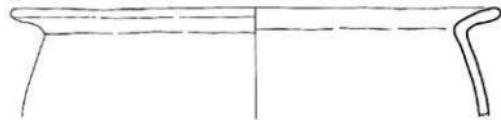
003



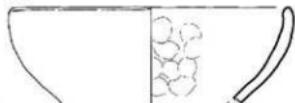
006



004



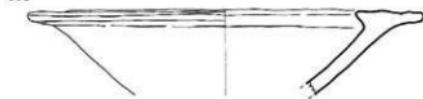
007



009

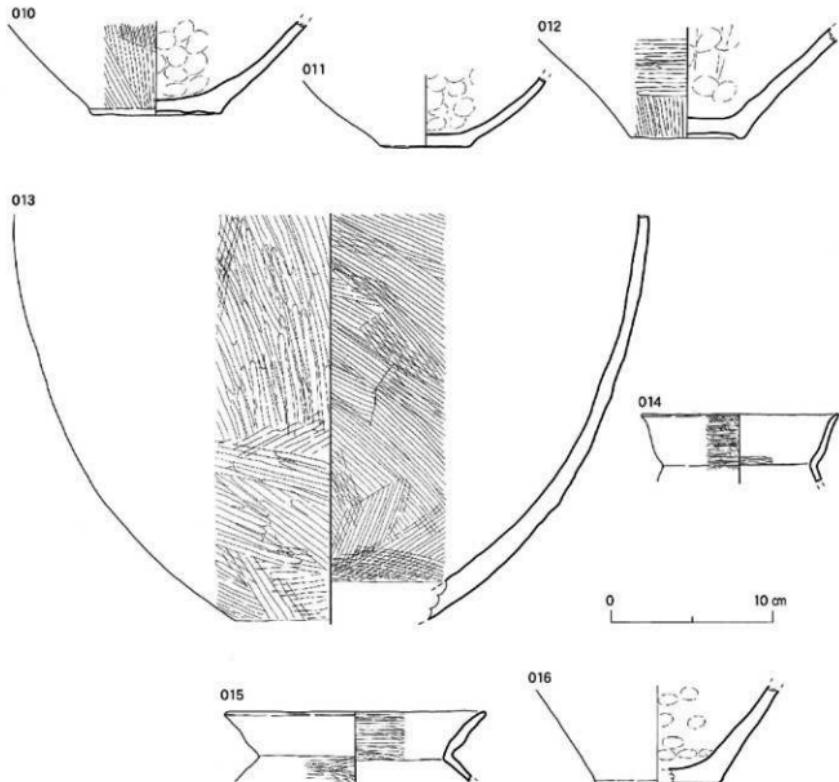


008



0 10 cm

第6図 SX001 土層図・出土遺物実測図1 (1/60・1/3)



第7図 SX001 出土遺物実測図2 (1/3)

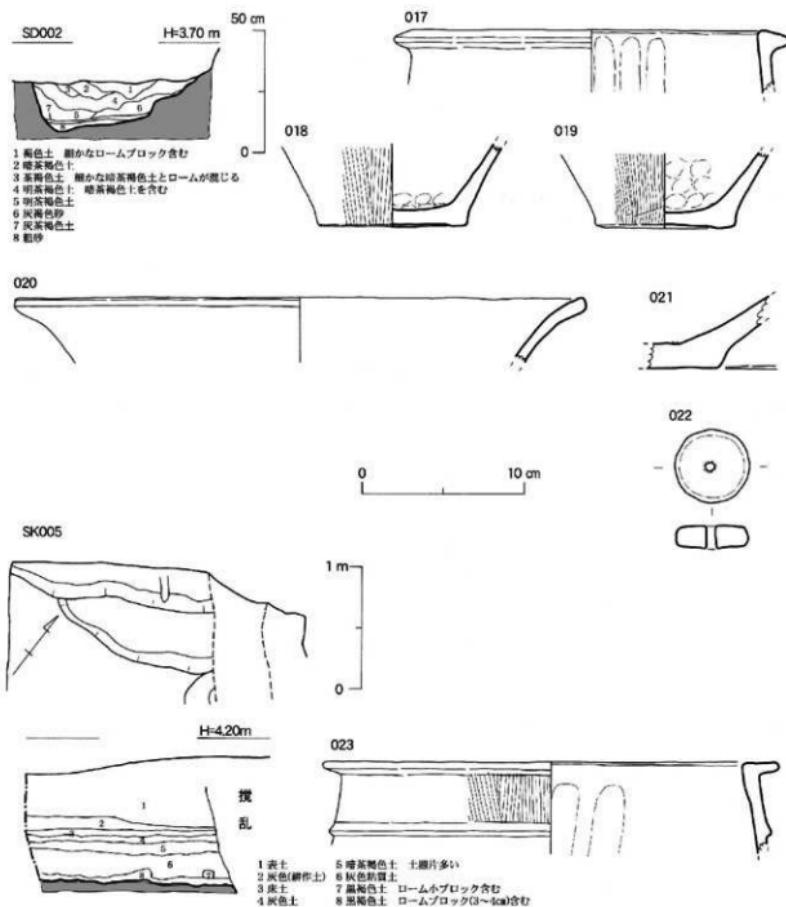
ため不明である。内面は胴部に縦方向の指ナデを施し、胴部と底面の境に指オサエの痕跡が残る。006は河川上層から出土した器台である。上下両端とも欠損しており、くびれ部の径が8.3cmを測る。色調は白に近い薄い灰褐色を呈す。胎土中に1mm前後の白色砂を多く含む。調整は外面がハケ目、内面は口縁下が横方向のハケ目、くびれ部がナデ、くびれ部から下が縦方向の強いヘラナデ、下端部には斜め方向のハケ目を施す。焼成は良好である。007は河川中層から出土した鉢である。復元口径は17cm前後で残存高は5.9cmを測る。色調は淡黄赤褐色を呈し、外面に黒斑がみられる。胎土中に多くの白色砂と赤褐色粒を含む。調整は外面と内面口縁端がナデで内面は全面に指オサエの痕跡が残る。焼成は良好である。008・009は河川中層から出土した高坏の坏部である。008・009とも両面は丹塗りのため赤褐色を呈していたが、現在は摩滅のためわずかに残存するのみで全体に赤みをおびた黄褐色を呈す。008は復元口縁24cmを測る。胎土中に白色砂を多く含む。調整は口縁上面と外面が摩滅のため不明、内面は横方向のミガキを施す。焼成は良好である。009は内面に比較的丹塗りが残っており、

一部は濃赤褐色を呈す。胎土中に白色砂を多く含む。調整は外面が縦～斜め方向のミガキ、内面に横方向のミガキを施す。焼成は良好である。010～012は河川中層から出土した壺底部である。010は底径7.5cmを測る。色調は内外面とも淡黄赤褐色～淡黄褐色を呈し、外面と外底部に赤色顔料の痕跡が残る。胎土中に白色砂を多く含む。白色砂の粒は1mm前後が多いが3mm程の大きな粒も含む。調整は外面に縦ハケを施す。ハケ目は細かなものとやや粗めの2種がみられる。外底部は中心に向かって渦巻き状を為すナデである。内面は摩滅のため不明瞭であるが、全面に指オサエの窪みの痕跡が残る。焼成は良好である。011は底径5.5cmを測る。色調は内外面とも底部付近が暗灰～黒色、胸部は淡黄褐色～淡灰褐色を呈す。胎土中に白色砂と赤褐色粒を多く含む。調整は外面が摩滅のため不明、内面も摩滅しており、指オサエの痕跡のみが残る。012は底径6.6cm、残存高6.4cmを測る。外面にはわずかに丹塗りの痕跡が残る。内面は淡黄褐色～暗灰褐色を呈し、一部に赤色顔料が垂れた痕跡が残る。胎土は精良で細砂を少量含む。調整は外面の底面直上が縦方向のミガキで、その上の胸部には横方向のミガキを施す。内面は縦方向に指ナデを施しながら最後は押さえて止めている。焼成は良好である。013は河川中層から出土した壺の胸部下半である。色調は外面が灰色～暗灰褐色で一部黒斑が見られる。内面は黒色を呈す。胎土中に細砂～6mm程の粒を多量に含む。調整は外面が縦ハケの上からミガキ、内面には斜め方向のハケ目を施す。焼成は良好である。014は河川中層から出土した土師器壺の口縁部である。復元口径12cm、残存高4.2cmを測る。色調は内外面とも黄褐色を呈し、少し赤味を帯びる。胎土は精良で砂粒を含まない。調整は外面が斜めハケ後横方向のミガキを施す。内面は摩滅のため不明であるが、頸部の一部に横方向のミガキが残る。015と016はAトレンチから出土した。015は土師器壺で復元口径15.8cmを測る。内面は淡褐色、外面は煤付着のため黒色を呈す。調整は口縁外側が横ナデ、内面が横ハケ、胸部外側が横ハケ、内面が横方向のケズリである。016は壺底部で復元底径7.8cmを測る。内面は淡褐色、外面は煤のため灰褐色を呈す。胎土中に細砂を多く含む。調整は摩滅のため不明であるが、内面に指オサエらしき窪みが残る。

2) 溝

調査区の北側に位置する。調査区東側ではSX001に平行するが、中央部で流れを南西に変えてSX001にぶつかる。調査区西壁の土層(第6図)ではSX001に切られている。隣接する31次調査でも平行する溝が4条出土している(福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集『比恵遺跡群(11)』P110)が、このうちSD003が本調査区の溝に統く可能性がある。

今回確認した溝は本来1条の溝であるが、機乱によって分断されているため便宜上SD002・003・004とした。第31次調査のSD003では須恵器壺の破片が出土しており、古墳時代後期とされている。SD002 調査区の西端に位置する。幅110cm、深さ30cmを測り、断面は逆台形を呈す。底面の標高は3.49mを測る。土層図は第6図中央の26～29層である。底面直上は周辺の包含層と溝の壁が崩落したと思われる茶褐色土と黒褐色土のブロックで、その上に薄い粗砂層が乗る。溝の下半は灰色の細砂で、上半は茶褐色土である。底面には凹凸がみられ、流れにより削られたものと思われるが、埋没時には細砂が堆積しており、ある程度緩やかな流れだったと思われる。また上層の茶褐色土は、細砂で埋没した後、再度掘り直したものと思われる。壺底部や高杯など弥生時代中期の土器が数点出土した他、弥生時代後期や古墳時代前期の土器片や土製錠錐車が出土した。出土遺物(第8図017～022)。017は壺口縁である。復元口径は約24cmを測る。色調は黄褐色を呈し、口縁は煤のため黒褐色を呈す。胎土中に白色砂と赤褐色粒を多く含む。調整は全体的に摩滅しており不明瞭であるが、内面には指ナデ



第8図 SD002 (003・004)、SK005遺構・遺物実測図 (1/20・1/40・1/3)

と思われる縦方向の窪みが残る。018・019は壺底部で018は復元底径9cm。色調は黄赤褐色で、内底部は灰褐色を呈す。胎土中に白色砂と赤褐色や黒褐色粒を多く含む。調整は外表面が縦ハケ、内面は摩滅のため不明瞭であるが内底部に指オサエの痕跡が残る。019は復元底径は8.5cmを測り、色調は黄赤褐色を呈す。胎土中に白色砂と赤褐色や黒褐色粒を多く含む。調整は外表面が縦ハケ、外底部はナデを施す。外底部の端に粗圧痕らしき窪みが見られる。内面は全体に指オサエ後ナデを施す。020は広口壺の口縁である。復元口径は約36cmを測る。現在は全体に淡黄赤褐色を呈すが、赤色顔料を塗布していた可能性がある。胎土は精良である。摩滅のため調整は不明である。021は壺底部である。大型の個体で壺底の可能性がある。色調は外表面が灰白色、内面は暗褐色を呈し、胎土中に3mm以下の白色砂を多く含む。調整は内外面ともナデを施す。焼成は良好である。022は紡錘車型土製品である。径4.4cm、

厚さ1.4cmで、中央孔は径5.5mmを測る。色調は白っぽい淡褐色を主として赤、黄赤、黄色の斑点が点在する。胎土は2mm前後の砂を多く含む。調整は摩滅のため不明である。

SD003 北端部中央に位置する。幅69cm、深さ15cmを測り、断面は逆台形を呈す。底面の標高は3.39mでもっとも低い。底面全体に木の根による擾乱があり、遺存状態は悪い。出土遺物はない。

SD004(第8図) 調査区東端に位置する。幅62cm、深さ28cmを測り、断面はいびつな逆台形を呈す。底面の標高は3.45mを測る。覆土は最下層に粗砂が堆積しており、強い水の流れがあったことを示す。上層では茶褐色土を多く含み、壁面崩落による埋没と考えられる。遺物は土器片が3点と黒曜石片が1点出土した。土器は同一個体の物と思われるが接点はなく、時期等は不明である。SD002とSD004の底面標高は東側のSD004が4cm程低いが、31次調査の報告では東から西への流れとなっている。

3) 貯蔵穴

SK005(第8図) 調査区北西端に位置する。遺構の大半が調査区外に延びていて遺構の規模は不明である。31次調査西側で貯蔵穴がまとまって出土していることを考えるとSK005は貯蔵穴の残欠の可能性が高い。現状で検出面から底面までの深さは24cmで、最も深いところの標高は3.0mを測る。

北壁土層(第8図)でみると、底面直上は黑色土にロームブロックを含んでおり、黑色土堆積中に壁面が崩落している。中層は灰褐色粘質土で、その上に土器小片を多く含む暗茶褐色土が堆積している。遺物は弥生時代中期前半の甕と壺、時期不明の土器片の他に砂岩製の砥石と黒曜石片が出土した。出土遺物(第8図023)は甕口縁である。復元口径は約28cmで淡灰褐色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む。口縁下3cmに突帯がつく。口縁と突帯間は縦ハケ、突帯部と口縁から内面は摩滅のため不明である。

3 小結

今回の調査では建物基礎等による擾乱で遺構の遺存状態が悪く、出土した遺構は溝1条、貯蔵穴の残欠1基、柱穴状遺構1基のみである。SK005は前述したように貯蔵穴の残欠と考えたいが、30次・31次・37次の各調査地点で出土した貯蔵穴は弥生時代前期中葉から後葉に属しており、SK005から出土した遺物(第8図023)はそれより弱干新しく中期初頭まで降る可能性がある。023が埋没時の紛れ込みかどうかは、更に周辺の調査の積み重ねが必要である。今後の調査に期待したい。

遺構番号	層	性格	時代	遺 物	備考
001	茶褐色土層	河川上層	古墳時代後期～古代	器台(弥生時代後期～古墳時代)、壺(不明)、甕(弥生時代中期前半?)、高环(弥生時代中期～後期)、壺底盤(弥生時代中期後半)、土部器(古墳時代初期)、石斧	
001	灰色シルト～粗砂上層	河川中層	古墳時代後期～古代	壺(弥生時代中期後半～後期前半)、甕(不明)、土器片、安山岩片(加工痕なし)	
002	溝		古墳時代後期	甕(弥生時代中期)、高环(弥生時代中期?)、甕底盤(弥生時代中期)、甕前部(弥生時代後期?)、土器片(弥生時代～後期、古墳時代前期)、土製防護壁、遺物なし	002と同一遺構
003	溝		古墳時代後期	土器片(3点 同一器体)、黒曜石片	002と同一遺構
004	溝		古墳時代後期		
005	貯蔵穴?	弥生時代中期		甕(弥生時代中期前半)、壺(弥生時代中期)、土器片(不明)、砾石片(砂岩)、黒曜石片	
006	土塙(擾乱?)	不明		不明土器片 3点のみ	
007	柱穴状遺構	不明		なし	
Aトレチ				土器片 22点(ほとんど壺片か 弥生時代後半～古墳時代)	
Bトレチ				ガラス瓶、壺底盤(古墳時代?)、甕口縁(古墳時代?)、高环(弥生時代)	
I区表探				不明土器片 2点	

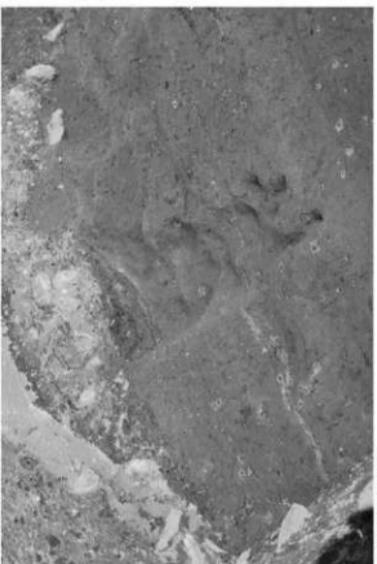
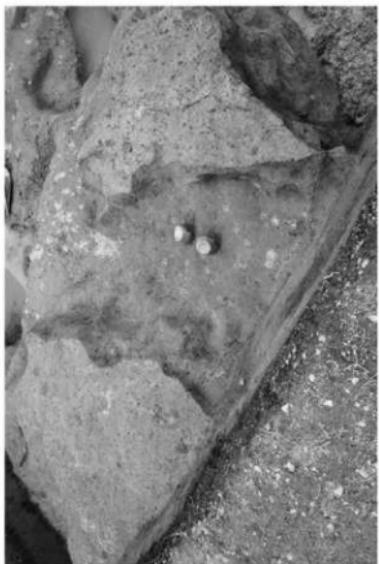


1. II区全景(南東から)



2. 調査区西壁土層(北東から)







2. SK005 (南東から)



4. SX001 Bトレーナ (北西から)



1. SK005 (南西から)



3. SX001 Aトレーナ (西から)

報告書抄録

ふりがな	ひえ64							
書名	比恵64							
副書名	比恵遺跡群第122次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1170集							
編著者名	屋山洋							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	2012年3月16日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
中村町遺跡4次 4丁目202番	博多区博多駅南 4丁目202番	40134	20127	33° 34' 54"	130° 25' 42"	20100908～ 20100922	120 m ²	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
比恵遺跡群第122次調査 集落	弥生時代中期前半 古墳時代後期～古代		溝・貯蔵穴	弥生土器、土師器、 須恵器				
要約	比恵遺跡は福岡市のはば中央部に位置し、福岡平野の中央部を流れる那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上の北端部に位置する。今回の122次調査は北半が台地、南半が河川である。北側台地上で古墳時代後期の溝と弥生時代中期前半の貯蔵穴、時期不明の柱穴状遺構が出土した。							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1170集

比恵 64

－比恵遺跡群第122次調査報告－
2012年(平成24年)3月16日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 巧文社印刷株式会社

